雅言解

三

つ 一丁
ね 五丁
な 七丁
む 十四丁
う 十五丁
の 二十丁
お 廿一丁
く 廿六丁
や 廿九丁
ま 卅一丁

ホ 2
4434
3

○蓇ムヘ古ハ「フヽム」ト云後ニハ今ノ如クツボムト云ヘリ。
つぼむ

○ツトハ朝ナリ。早朝ヲ云。
つと

○苞苴ヲ訓ム「ワラヅヽ
つと

雅言解巻之三

東京　鈴木重嶺纂

都の部

崇　たゞハおちて枝をつらつらぬれどつぼめる心のおくてちしらく

夫　つぼむとうちあくてまたぬ花なれば指をかゞねて待つる春風

古　つとめてゆく人の袖もやすからぬ花おりつかものかおりし袍

古　うちおくるやくそくあまりのこゝろをそへてつとめきん

門へ 利 4 號 1520 卷 3
門 ホ 2 號 4434 卷 3

ミナリ。此義ヨリミヤゲ（土産）ノ意ニ変リタルナリ。山ヅト濱ヅト家ヅトナド云ヘリ。

つと

○苞苴（ワラヅト、ミ）ナリ。今ツト入リ、フキノタフノツトナド云フニ同シ。カレイヒノツトハベンタウノツトナリ。

つゝむ

○セイダス

○ホネヲル

つどひ

○集又ハ湊ヲ訓ム。アツマルナリ。古事記ニ神集（ツドヒ）集而トアリ。

つちくれ

○塊（ツチノカタマリ）ナ

古 をぐろ崎みつの小じまの人ならば都のつとにいざといはましを

新六 しばしとて山井の清水むすびてかれいひのつとをとくぞいそぐ

万 わがせこし耳よく聞ぞあしびきのたかくわがせつとめたるべし

詞 春の野のをぎきえてあらはれにけるつとめてはなぞあるべかりける

万 百しきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここにつどへる（朗 さくらかざして）（日 けふもくらしつ）

万 あわゆきのさゞれまつづひみるまでやつるゝみなかいとをしきかも

今昔 かりしめやの板ぶきすてもこゆきつちくれしてやつくろひあれん

り

つるもぎ

○鶴厩之裾ヲマクリテカチ渡リスルサマヲ云。

つるばみの衣

○ツルバミハ橡（クヌギ）ナリ。其実ヲ橡斗（ドングリ）ト云。其斗（カラ）ヲ染草ニ用ウ。令義解ニ橡ノ黒衣トアルハ、ツルバミ染ノ衣ナリ。

つかのま

○万葉ニ束ノ間トアリテ暫時ヲ云ヘリ。トキノマ、ツユノマ（マ）ナド云フニ同シ。

つかのあひだ

○前ニ同シ。

今昔 かも川をつるはぎすてもやまとひれうまづのまとぶをしとあゆひて

万 つるばみのきぬくろきものしまれくあしきぬをゆるくはあやしわかるるかも

詞花 むかしきしもろこしおもひあらんつるばみのたぬきをとるまで

万 夏野ゆくをしかの角のつかのまもいもがこころをわすれておもへや

今 あきくさのしげみがなかのつかのまもはなれさせやつかのまもわすれてぞおもふ

万 大あらきのをち方のべにかれるかやのつかのあひだもわれわすれめや

同 くれなゐのあさはのゝらにかるかやのつかのあひだもわをわすらすな

つかぬ

○東ヲ訓ム。俗ニ「タバネル」ト云ヘリ。

古 かりてあれしどもの方に心のゆかればつかぬもはくぬこひもするかれ

内 はりはれそふてしごふあらくは河をこそは古ひのこゝろあのつがはぬをせん

つがひ

○番ヲ訓ム。騎射甫カナドニ一ツガヒト云ヒ。鳥ニモ二羽ヲ一番ト云ヘリ。

千 ひとりぬるわれにてしりぬ池水につがはぬをしのおもふこゝろを

新勅 すまきしふるきあまきしろのねぎおしはつがひしそらずゝまことひき

つかさ

○山ノツカサ。野ツカサ。岸ノツカサナド。コトサラ高キ所ヲ云。ツカサ人。市ノツカサナド云フモ。上ノ意ニモトヅケルナルベシ。

万 ふるゆきにくもはおほくしもふれども山のつかさのいろづく見れば

つれなし

○情コワシ
○情ナシ
○ツラノカハアツシ
○真名伊勢物語ニ強顔ヲツレナシトヨメリ。

伊物 あふことのあるつくりのことくもなんつれなき人の緒の数見ん

拾 いなり山やしろの数を人とはゞつれなき人をみつとこたへん

つれもなき

○前ニ同

は みかの池にすむをしどりのつれもなくかゝるこゝろのひとりしもすれ

新古 つれもなき人の心はうつせみのむなしき恋に身をやかへてん

つれづれ

○徒然ト書ク。ヒトリニテサビシク思フ意ナリ。○何モスルコトナクシテサビシキナリ。

古 つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし

玉 ちくかめつるこゝろのそでをかきくらしつれづれとまさる思ひの涙

つゝまし

○ウチトケカヌル意
○ツヽミタイ。カクシタイ。ハヅカシイト云ガ如シ。

は於 沖つ浪うちよせんとやつゝましのひよるくぎさにはなし縁ば

つゝみなく

○ツヽガナシ

万 なぐさむるこゝろはつゝみなくさきくいましてはやかへりこそ

万長 あし原の瑞穂の國ハ中略まさきくとつゝみなくさきくいまさば下略

つゝむでおく

○前ニ同

万 大船をあるへふりさしはやみ実つゝむともあらへやらくかゝせ

つゞら

○濕草ナリ。馬鞭草ト名久末豆々良。

拾於 ふかりける谷のつゞらまつゞら来てみやかれはなぞしかつられ

拾於 こぬ人をまつくくもくさきまつゞらのふかきひるきゝん

つゞみ

○鼓ヲ訓ム。今云大鼓モ亦ツヾミナリ。

塙 うちなる人しあきなはきまて代はかなしつゞみもたけむなり

つゞらをる

○九折ヲ訓ム。葛ノ蔓ヲ折返シ〳〵曲ゲタル如キ形ノ路ヲ云。山ノ嶮岨ナル坂ニ多ク云ヘリ。

新六 ますらをのつゞらをりたるふるき道をとほりかくぞこゝろやましき

つらし

○ツラネ〳〵ノ義ナリ。常ニ熟ノ字ヲアテ用ウ。

万 こせ山のつら〳〵椿つら〳〵にみつゝおもはなこせの春野を

つらづゑ

○今ホヽヅヱ(頬杖)ト云

古 あしびきの山にしもとめあるなれどつら杖のこゝぞやなげくれける

夫 松もすぐるもの思ひにつらづゑつくはなかなかもつれざりける

つらゝ

○ツラヽハ「コホリ」ト云フニ同シ。軒端ナドヨリ垂ル、氷ヲノミ云フニアラズ。たるひノ條ヲ見合スベシ。

推亦 つらゝとぢ谷のしづく山川をとまるべしがてらふぐややにかん

流於 かへしきの雲あぢの神つあまつみつれつらゝの序のとしの初にや稀

つむ

○身ヲ抓ル之

夫 あづまなるきえぬる雪のひまにこそつむてふありけるわかな

拾玉 われもまたふかきこゝろをつみてけりおもふべしいのちにたえしきみのまゝにつむや

つのぐむ

○芦ニオホクヨメリ。新芽ノメグム如キ形ヲモテ云フナリ。

拾於 みしまえにつのぐみわたる芦の根のひとよのほどにはるめきにけり

同 難波つさとゝ吹風はあさまこそがつのぐむ芦の[illegible]

つくづく
○歎息ノ意ナリ。ツクヅクツライ〳〵ナド今モイヘリ。

於 いつとてもおもはぬ時のなけれどもつくづくとねたるあきのよ
和泉式部 くれぬめりいくかをかくてすぎぬらんいりあひのかねのつくづくとして

つくも髪
○江浦草(ツモ)今モヅクト云モノト古意ニハ云レタリ。藤井高尚ノ新訳ニ古意ノ説違ヘリ。和名抄ニ水菜ノ部ニ入タレバ、モヅクナラズ。フトヰト云モノナルベシ。フトヰヲ今モモヅクト云ヘリ。末ニチヒサク穂ノヤウナル花サケリ。ソノ花ノサマ老人ノ髪ノ短キニ似タレバ云々トアリ。又同書ニ立入信友云、ツヽモ髪ヲツクモト書誤リテ世ニ廣マリ傳ハレルナルベシト。或ハ然ラン。

伊物 もゝとせに一とせたらぬつくも髪われをこふらしおもかげにみゆ
新 つくも髪ひとひぬるまでしたしくはおもかげにみえくるものを

つて
○ツタヘ(傳)ナリ。タヘノ約(ツヾメ)ハテナリ。ヒトヅテハヒトヅタヘナリ。

古 まくらより人もしらぬ千々の床中をかりふきとやつてはし
和書 ゆくへまだつらしとながれつゝてもたえぬのあふせをまつとさふべく

つぎて
○ツヾイテヽ

万 梓弓ちるやまちつく家をはなれてつぎてきくらんべくひはのこゝろ

つゆ
○チヨツト
○ワヅカ

古 今よりはつぎてふらなむ我やどのすゝきおしなみふれるしら雪
古 ぬれてほす山ぢの菊の露のまにいつかちとせを我はへにけん
詞 秋のよはつゆもねやらぬ月をみてわきてふきけんやかんしの秋

つひに
○ドノミチ
○シマヒニハ
○ハテハ
○トウ〳〵

古 つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを
千 もろともにあれじ春は生しかどつひにまよはでやつれぬるかれ
む ほとゝぎすさだめなきさ月はよびやつひの別れにあらんと十ゐ

つひの
○臨終ナリ。終焉(ヲハリ)ノ地ヲ「ツヒノスミカ」ト云。

続千 思ひきやそのかみのやまひ草をつひのすみかとたのむべしとは

禰の部

ねぢけ人
○佞人ノコトナリ

ねぶハらハ
○額ハクノハシノ約ハ。コナリ。額フノコヲ延ベタルナリ。

ねよとの鐘
○亥ノ時（マヅ凡ソ今ノ十時ニ當ル）ノ鐘ヲ云。天武紀ニ人定鐘ト見ユ。人々ノネシヅマル頃ノ鐘ナレバナリ。

ねたまし
○嫉ノ字ヲ訓ム。ウラヤム意。ノヤシキ意。又ニクム意ヲモオブ。

万 ならやまのこのてがしはのふたおもにとにもかくにもねぢけ人のとも

続古 ねぶかくは苔のもとふて我まちしんそのまちしきのもち月のひ

万 皆人をねよとの鐘はうつなれど君をし思へばいねがてぬかも

夕拾 でのなごりてやすむ思ひまいるをぬらんねよとふ鐘の音をききつくふ

拾 あぢきなくねやふきこしの夢をみるべきにねたくも寝覚をさそひ来てける

後拾 見ん後さバ人果しらぬ山やまねたくぞおもふひとりねぬらん

拾玉 ましほふ手むくはたづねずねたくもそれのあらじ秋あり

ね

○佛スル詞ナリ。ア、セヨ。カウセヨト云フヨニ同シ。

ねぐ
○祈ルナリ。接スルニネガフノ約ナラン。ガフノ約グナリ。

ねくたれがみ
○寐乱レ髪ナリ
○猿沢ノ池ニ采女ノ身ヲナゲシ故事ハ大和物語ニクハシ。

ねこじ
○根グルメ抜キ取ナリ。古事記ニ根コジニネコジテトアリ。今俗ニ

な やすみねとおもへるみ天なれどもさぬハつきものぞ有る

新古 玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

続拾 あさましやけふもあけぬの山かざりにねぐらふ月のいまきぬらん

拾 わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

五拾 吾妹子がねくたれがみのさるさはにあされるぞきくさらぬ山ほとゝぎす

拾 ひとゝせにねこじて植しわがやどの若木の梅は花咲にけり

壬二 さるのこゝろもやらぬ春の梅が枝をねこじて植しひとぞふりゆく

ねこめ

根コギト云之。

ねごめ

○根グルメナリ。根ト共ニノ意。

ねてのあさけ

○寝テノ其翌朝ノ明ケ方ナリ。

ねざめ

○イネテ後目サメテ寝ラレヌヲイフ。目覚メトハ別ナリ。故ニ宗匠家ニテ初老後ナラデハヨマセヌヨシ。若キ人ハ寝覚ヲ知ラネバナルベシ。むノオキテナリ。

なをて

○暚ヲヨム。麗手ノ義。直ナル道ヲ云。今モナホケハテ道トイフナリ。

は 頼もしなくるふを見るよりハねざめしれもせのわきもこゝろさへ

古 しづくさの峯のやどれる蜂とあれとねての朝けの霜のふりしきも

同 わくらはに咲つけておもひとすゝぬねざめのくやしさくらん

今 おもふどに袖をぬらしてあかれうれしき梅の枝あるのねざめに

千 こゝろよりのねざめのちかきまてれておもひくらしあさこちして

夫 玉かくのみえのありてのさし柳なをやもりてあれさらずやどしつる

奈の部

なにおふ

なにしおはゞ

なにしおへば

○名ニ負フノ意。シハ助語之。心バト受ル格之、名ニシオフトヨメルハ非ナリ。

なにはめ

○難波女ナリ。万葉ニ難波男モ見エタリ。

なにはおもはず

○何事モオモハズナリ

なには

○ナニカ

○難波(ナニハ)ニ通ハセテ云ナリ

は かぎりなき名におふ藤の花なれば底ひもしらぬ色のふかさか

古 名にしおはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

拾 名にしおへどくすしぶりかゞみ山秋夜のかげハくもれ

千 なにはめのすくもたく火の下こがれうへはつれなきわが身なりけり

古 津の国のなにはおもはず山しろのとはにあひみんことをのみこそ

新勅 あはれなる難波のこやのおとづれてあまさへ人のこととかゝるらん

夫 かしこきはなにはのことのあれどさつの国のひろさもたりなき

なにゝ
○ナニシニノ意

なにばかり
○ナニホドモ

なにならば
○ナンデモナイ
○ナニホドノコトガアラウヅ

なにごゝち
○ドノヤウナ心地

古 あひ見ずはひさしかるべき吉野川なにかはふかく見えてこひをあらん

は いまはむかしとてしりをも今さらなにかふかくあけてすちらん

大和 何ばかりかのくるはるまでよるのあれひとをとやかくとみるがうりし

拾 をのれすのすさびのかずは何ばかりまでつきせぬあらゆる君がこ代のれ

続後 君が代のかずはいくらべしかずなにほどゝちひろのはまのすさごなりとも

古 としふればむかしもひときものとなりにけるのちはなにごゝちせん

新古 そのかみをききしだまうみてかなしきなにごゝちやれなばなふちさん

なにそは
○ナンノヤクニタツコゾ。かざし抄ニ、ナンヂロヤイフテミヤレト譯セリ。

なにとて
○ナゼ
○ナニユヱ

なにしか
○ナンデ此ヤウニ
○ナンデマア

なにせんに
○ナニヽセウヅ

古 かへる山なにぞはありてあるかひはきてもとまらぬ名にし社ありけれ

古 いのちやはなにぞは露のあだものをあふにしかへばおしからなくに

は 花のごとなきものはなにのゆゑなるとてなにとて人はいふらん

詞 とゞめぬすぎしむかしを何とせばなにかは物をおもはざらまし

古 東路のさやの中山なかなかになにしか人をおもひそめけん

後撰 をしまずはあふさかなれど年もつれなくもなにしかなほもおもひそめ

万 白かねもこがねも玉もなにせんにまされる宝子にしかめやも

古 あふことのかたみをだにも我はなにせんにおもひもなきところのなぐさまれくふ

なほ
○ヤハリ
○中世以後ハ、今云猶々ノ意ニヨメルモアリ、

なほ
○タヾ一通リ
○物語ブミニ、父ハナホ人ニテ、母ナン藤原之ケル」トアリ、ナホ人ハタヾ一ト通リノ人ト云フ義、

なほざり
○等閑ヲ訓ム、今云ニ同シ、

なほき
○スナホ之直キヲスグト云フハワロシ、○此歌ニ、毛ヲ吹キ疵ヲイフトハ、サヽイノコマヂセンサクシテ、トガメダテスルトノ意ナリ、前漢景十三王傳ニ、有司吹毛求疵云々ト見エタリ、

なべて
○皆ヿトゴトク
○スベテ

は　ふしてぬる夢ぢにだにもあはぬ身は猶あさましきうつゝとぞおもふ

同　人ごゝろあくへてこれぞあしきゆゑまさるわれかしこのゆゑ

於　それとはぬむしのこゑうふかつる宿あれふる里のまつやこひしき

於　さびしさはなほ杜のしら梶のそれちれどもしくぞおもひふかぬる

は　なほざりに秋の山ぢをこえくればおらぬにしきをきぬ人ぞなき

は　なほき木にまがれる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなき

古　ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はん

なべに
○並ニナリ、是ト彼トナラブ時ニ云、今「ヲリニ」ナド云ニ近シ、

などの
○ナゼニ
○ナゼカ
○ナドニハカト云ヒ、ナゾニハヤト云フガ定格ナリ、

などて
○ドウイフワケデ
○ナゼニ

同　つくばねの岸のむらちがは落あつまりたるもまへぬもなべて逃しも

は　あすか川わたりてひとつのふちせなるなべての世をばみつるや

古　日ぐらしのなきつるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける

同　夜をさむみ衣かりがねなくなべに萩のしたばもうつろひにけり

古　うき世にはかどさせりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする

於　たれぞこのほどぬるもあれもゆかしきふたゝびなどて夜ながきにかせる

於　あさころりとくるまもなき夫のまうなどてそぶつるなどぞわるらん

伊物　なぞてかくあふごかたみになりにけんみづもらさじとむすびしものを

など
○ナゼ

古 やどりせし花たちばなもかれなくになどほとゝぎすこゑたえぬらん

月 瀧つせの中にもよどはありてふをなどわがこひのふちせともなき

なり
○産業ナリ。「ナリ」ハ「ヒ」ト云ニ同シ。

万 久かたのあまぢハとほしなほなほに家にかへりてなりをしまさね

なりはひ
○前ニオナジ

万長 つくりたるそのなりはひを雨ふらず日のかさなれバうゑし田もまきしはたけも 下畧

なる
○成就ヲ云

な 人しきびしなふんハおなじ世のなかにいれしふなべくさらくのれ

古 をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはん

なる
○実ノ結ブヲ俗ニナルト云ヘリ。前ノナルヲ兼タリ。

古 花の木にあらざめれども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

れ段 埋れ木ハなかくこゝろもあかりしふるのなるまでぞあはれなりける

なるこ
○鳴子ハ田畑ノ鳥ヲ追フ具ナリ。古クハ引板（ヒタ）ト云ヘリ。

夫 道のべのわさ田のなるこふくれども秋をかけてぞ風もふかなむ

なかごと
○我ト他トノ間ヲサクル譏言（サカシラゴト）ナリ

万 汝をと我を人ぞさくなるいでわぎも人のなかごとききこすなゆめ

ながめ
○ナガシメく。心ニウレヘ楽シカラズ思フトキ。見ルトモナクジツトナガムルヲ云。見ルヿニ云ハ非ナリ。

古 花の色ハうつりにけりないたづらにわがみよにふるながめせしまに

は あひ見でうつろふ花をこゝろのみをしみもえしられぬながめするかな

新古 ものおもはでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋のゆふぐれ

ながむ
○遠クヲ打望ムヿヲ云。

拾 くれなむとおもふをそのゝぞながむつきいでんほどこそ思ひあかされ

見ルトハ異リ。

なかぞら
○心ガクウ(空)
○ウチヤウテン(有頂天)
○中天ニカケテモ云ヒ。又一ツノ詞トシテモ云。

なかば
○半ナリ物語ブミニナカラトモ云。

ながる
○流ルヽ。ナガラフト云心ヲ兼ヌ。ナガルヲ延レバナガラフナリ。ラフノ約ルヽ。

千 なかぞらにあめのしたてるつきかげをひとつまなりぬのくるかな

古 天川しのはつかのまにきゝしよりなかぞらにのみものをおもふかな

は うづらなくあれたる橋にあかり社おもふところ哉なかぞらにせあ

夕顔 ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜にむすぼほれつゝ

子 よしの山ちりなかばなる花をみてたえくのこるふるさとの春

た なかなかに絶なんとおもへどなかれてもつきせぬもののやすくなみだを

日 いせの海のなかれてのなかれのなかれもせん人のこゝろを

ながらふ
○ナガラフハ永歴ナリ。世ノ中ニアリフルヲ云。

なかなかに
○カヘツテ
○ナマジヒニ
○歌ニヨリテ。譯シ方一様ナラズ。

な
なれ
○汝ナリ

拾 さしのぼるたかまの山のながらへてたのしかるべきちよの代のかれ

貫之 なかなかにかくてあるべき世なりけりゆきめぐりてもおなじ世の中にながらへてゆく

新古 なかなかにへだてしところやものおもひなかなか世ぞならひき

古 いそのかみふるの中道なかなかにみずばこひしとおもはましやは

同 東路のさやの中山なかなかになにしか人をおもひそめけん

拾 なかなかにあまのかはしなかなかにあかくはなれば人をもみぎはにはしるべき

万 あふみのうみ夕浪千鳥ながなけばこゝろもしぬにいにしへおもほゆ

古 なかなかになかなかなくてもあやなきはわれもしかすがなきすぎなれ

同 手をさやかなるなかの夜しるなれとしぞなかれとふ年のへぬれば

なぞ
○ナンデ
○ナンノ事ジヤ

なぞへ
○比ヲ訓ム。ナゾラフ之。ナゾヘナクトハ引クラベガタク之。

なづさはる
○擘觸人ニ馴ルヽノ意ナ。ナヅサハマクハナデサハリタシトナリ。

若菜下 恋わぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるらん

古 [illegible]

門 [illegible]

万 [illegible]

伊物 おもふ〳〵おもひすぐべしなぞ[illegible]

万 久方の天てる月もかくれなばなにゝなぞへていもをしのばん

六 [illegible]なづさはりぬるいもが袖なごりこひしくおもほゆるかな

拾 [illegible]

な
○勿ナリ。今俗言ニモ何〻スナト云ヘリ。即チ白此ナ之、

な
○此ナモ勿ナリ。ナ咲ソハ。咲クナト云フ之。ソヲ濁ルハワロシ。
○ナコソノセキ(勿来関ハ古陸奥國菊田郡ニアリ、常陸トノ界ナリ、

ならはしもの
○ナラハシガラ
○ナラハシハ慣習ナリ

なまじひ
○慭ヲ訓ム。今云ナマジ

門 [illegible]

古 [illegible]の手びきの糸をくりかへしことながくとも絶んとおもふな

古 わすれなん我を[illegible]人の秋にハあはんともせず

古 山ぶきハあやなゝさきそ花見んと植けん人の[illegible]

千 吹風をなこその関と思へども道もせにちる山さくらかな

古 人の身もならはしものをあはずしていざこゝろみん恋やしぬると

万 物おもふと人に見えじとなまじひに常に思へりありぞかねつる

ヒニ同シ。士清云生強(ナマジヒ)ノ義ナルベシト。

躬恒 さゞなみのよしやさゝなみなまじひに身をまかせてもわびつゝも逢ぬ

なまめく
○イヤラシイ
○イロケタツプリ

古誹 秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひとゝき

なげ
○ナサソウナ
○物語フミニ、ナゲノコトバ、ナゲノアハレナド云フハ、真実ノ心ナラヌカリソメ言ト聞ユ。ナゲノけハ無ナリ。

古 いざけふハ春の山べにまじりなん暮れなばなげの花のかげかは

續千 つのすしてみげしとゝめん櫻花ちらばなげのまの日くずを

な こゝろをハなげあるものといひながら忍わぬめハ君も忘るらし

なごろ
○波ノ黒ミテ高クタツナリ。今モ舟人ハナゲラト云ヨシ。

えまし 伊勢の海のあまの釣舟なごろをばいかにかやぶらん

天 わが恋ハうしほが沖こぐ舟なごろなりけりたゆみゆらみ

なごしのはらへ
○荒ブル神ナゴメシトテノ祓之(ナゴメンハ慰メン之)。一説ニ夏越トカキ六月ノ祓ヲ云トアレ氏余ハ取ラズ。○ハラヘハハラハセ之。ハセノ約ヘ之。

於 さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしのはらへなりけり

ほ於 みなつきもはらふるあるとかし浪もなごしのはらへうつれぞ

なごり
○ナゴリハ餘波ノ字アタレリ。打ヨセシ波ノ退キ残リタルヲ云。俗ニ名ゴリ惜シナド云フトハ甚違ヘリ。新古今以後ニハ今云俗語ノ名残ニ似タルモアレ氏例トスベカラズ。六帖ニモ一首似タルアリ。

古 さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

は むかしきゝしかゞみのなごりきハいつまで霞なごりなるらん

古よ また秋ものちりかゝるハあきはてぬのなごりぞなごりなりける

なぎ
○和(なぎ)グノ意ナリ。朝ナギ夕ナギナド云ヘリ。

古 雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらん

伊物 大淀の浜におふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども

なみ
○ヒトヽホリニ

万 ゆふなぎる松浦の川瀬の波のまもよどみなくありそひめやも

○ナミヽヽ
○コヽニハ波ヲ兼ヌ

なし
○居ラヌ
○ルスヂヤ

なす
○鳴スノ略也。

むかつを
○向ノ峰ヲ云。ヲハヲノヘノヲニ同シ。峰ナリ。

古 みよしのゝ大川のべの藤浪のなみにおもはゞわがこひめやも

古 えらくのこんといふをバ門さしてなしとこたへてはいらざらまし哉

於古 忍しきるあをなびけてとなふあしびのしとこなくら

古 秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらん

武の部

万 かゝみめこのむかつをにさひゆらばこのよのかげにあらまし

同 いとまあらばなづさひわたりむかつをの桜の花もをらましものを

むつれ
○睦ミ親シムノ義之

むつごと
○睦言ナリ。オモニ男女ノ間ノ親ミノ詞ヲ云ヘリ。

むつがたり
シタシミノ物語ナリ。

むつき
○襁褓ヲムツキトヨマセタリ。ミドリコノ衣ヲ云。コノ歌ニテハ皆睦月(ムツキ)ヲ兼テヨメリ。

は ゑのごとやりあきすのいまづかるかむつれつこの川ぞさびしき

於 とぎれへしみちのあけぼのむつれれどあやなくおやんおくらん

古 むつごともまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふ夜は

後 埋火のあたりは冬をわすれつゝむつがたりするよはぞすくなき

夫 からくともふたゝびこゝろはゆきかへるくづてふねむつかたりして

六 よるのほゆるしてこそみんそのむつきの中にをり秋ふけ

同 神かくしきぬなるむつきの千代のむつきをさきぬへき

うちきゝし

むづらし
○ワヅラハシ
○カラマリ合フノ意

むなぐるま
○空車ナルベシ

むなし
○クウ空
○何モナイ
○春の花ノ歌ハ色即是
空ヲヨメリ

むらさきの庭
○紫庭ヲ云

むらぎみ
○スナドリ人之和名抄
ニ漁夫和名無良岐美ト見ユ

今 あしらきれひやまあくかゝるくものいれすのむづらしくあだるかな

杜故 のきちてやるやがんさくとおもきそてねくもかくすむなくるまつれ

長秋 まちのむなきのもとちのちりをみてこそむなしきものとおもひしる

古 みしきるわびてまし ひとびと ひあぶ むなしきわらのなかやなりなん

明清 むらさきの庭のたる風けぶりてきゝつみえるそらのかくれ

夫 たまつくやそのむらぎみにはかなふさあ かきやのまきそふらちころ

むやひ
○舟ヲツナグ綱ナリ。俗
ニモヤヒト云ヘリ。

むせぶ
○哽咽ヲヨム。俗ニムセ
ルト云。

むすぶの神
○高産靈(タカミムスビ)
ノカミ神皇産(カムミムスビ)
ムスビノカミノ二神
ヲ云。

むすぼゝる
○結ブヲ延ベタルナリ、
ムスボヽレハムスバ
ルヽ之

千 むやひするかまのとまりのあえぞうそはやめしふみゆきもなかれぬ

同 ふるきまおもきのふるをむやひてあしきをはなれてかぜぞゆく

新古 思ひいづるときしも紫の下くさにむせぶうれしとはすれなさこふ

新葉 人間もしらぬわかきのわきあへりむせぶところはゆくかさまふし

拾 君こそむすぶの神ぞうらめしき つれなき人をなにつくりけん

狭衣 よろづへむすぶの神やつくりけんとくるときしもなきをるかれ

詞 いよねまくべきあのはとくるまでむすぶなくとはやらの原

新続古 はらふてもむすぼほれる流のいとものくるまでとけわたりける

宇の部

うゐのそら
○心ガクウニナル
○ウチヤウテン（有頂天）

拾 ひとめ見し人はたれとも志ら雲のうはのそらなるこひもするかな

新勅 ゆふげさへとゞめのすゞしさそしらうはのうはのそらなる秋を待思へ

うべ
○宜ヲヨム
○ナルホド
○モツトモヂヤ
○道理ヂヤ

万 うましみゐ見まくさびしく鮎くもきよき川をさやけミ

古 吹からに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらん

於 雅くされぞやのふつゝかなうへしうり悟めの子もそめきるなれ

うちつけに
○サシサダメテ
○ヂカアテニ

古 うちつけにさびしくもあるかもみぢ葉も主なきやどは色なかりけり

は うちつけにまねぶかれしき木に生る秋のそじめるそのふぞ思ふ

うちはへ
○打延（ウチハヘ）ナリ
○シキツヾイテ

古 さのみその時よりのちハうちはへて世はすちあれや色のつねなる

円 たねもなくふかく人のうちはへて年のをながく恋やわたらん

うちはし
○ウツリ橋ヲツヾメタルナリ

万 あすの川うち橋わたせ妹がいへぢやまず通はんときかすべくとも

目 せの山にたゞにむかへるいもの山事ゆるせやもうち橋わたす

うるま
○琉球國ヲ云ヨシモノニ見ユレド非ナリ。公任卿ノ集ノ此おぼつかなノ歌ノ詞書ニ、新羅ノウルマノ島人来テト見エテ、彼國ノ迂陵島ヲ云ヨシ。本朝麗藻ニ載タル詩ヲ引テ、契沖阿闍梨イハレキ。

千 おぼつかなうるまの島の人なれやわがことのはを志らず顔なる

うるさし
○ワヅラハシ
○メンダウ

伊物 むさしあぶみさすがにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

うたゝ
○和名抄ニ抹雨ヲ宇太

新後撰 山川の流るゝ水のうたかたのいくよをうきてもちるらしづくのみぞ

加太トヨミ。潦上ニ雨フリテ沫ノ起ル覆盆ノ如シトアリテ。水上ニ浮ブ泡ヲ云ナリ。

うたかた
○チヨツトノ間
○ニハタヅミ水ノアワナドニヨセテヨメリ。

うたゝ
○歌ニヨリテハ。ハカナイ。定メガタイトモ譯スベシ。

うたゝね
○轉寐ナルベシ。仮リ寐ヲ云。今云フニ同シ。

うれ
○上ナリ。ウレノルハヘニ通ス。

万 うぐひすのきなく山ぶきうたかたも君が手ふれず花ちらめやも

後 おもひ川たえずながるゝ水のあわのうたかた人にあはできえめや

続古 いつまでとしらぬあだなる世の中をうたゝかなしき身をはかなしと見んや

古 うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

新続古 うたゝねのとこよをかけて白妙の雲のすそのゝ秋のたちぬる

万 まきむくのひばらもいまだくもゐねば小松がうれゆあわ雪ながる

内日 ゆふづくのあふちふれそかゝすゞけをとながうれのしら露あすもみゆる

うれはしき
○憂フベキ也

うつたへ
○かざし抄ニハ。マンザラ。又理窟ニハツレテト訳シ。和訓栞ニハ。美妙ノ義ナリトアリテ。其他サマぐノ説アレドモ。イヅレモサダカナラズ。畧解ニハヒタスラ(一向)ノ意ナリト云マヅ此説ニ従フベキ歟。

うつしごゝろ
○識心ナリ。本心ト云フニ同シ。ウツリヤスキ心ニヨメルハ後世也。

うつせがひ
○空貝ハ身ノナキ貝也。

古 あしひきの山田のそほづおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

忠見 なにさあはかりあしどうつたへは山まどやるなさんとや見し

新勅 わがためはいろくべの浪のうつたへにあふかはぬべきそでのうへの月

万 ますらをのうつし心も我はなしよるひるとなくこひしわたれば

古 いでゝ人はこゝろのかぎりよきさ月かげのうつし心もいかでとふして

後拾 こゝろしさいはのひもあくばうつきゝのうつし心もふくゆるありつ

後拾 からころも袖しのうらのうつせ貝むなしきこひにとしのへぬらん

うなゐ
○髫髪ヲ訓ム。童児ノサゲガミナリ。

拾 わしきんをちぎりおけるうなゐごがちぎれしのちはつれのうゝ

新六 うなゐごがとぐしまさぬ髪ねぐさぐるまたなくやおひそめけん

うなゐはなり
○童ノ髪長カラヌヲ。ユハズシテ。ウナジ(項)アタリニテ放チ置クヲ云ヘリ。

万 たちばなの寺の長屋にわがゐねしうなゐはなりは髪あげつらんか

うらぶれ
○シホシホトシテ心面白クナキ様ナリ

万 ゆく川のすぎにし人のたをらねばうらぶれたてりみわのひばらは

古 秋萩にうらぶれをればあしひきの山したとよみ鹿のなくらむ

うらがなし
○何トナクカナシキ之。ウラハ心ナリ、ウラメヅラシナド云ウラハ皆同シ、

後拾秋 あさぢ原玉まく葛のうら風のうらがなしかる秋は来にけり

玉葛 みな人もこれをこふらしおもふ子のうらがなしくぞ音のきこゆる

古 君まさでけぶりたえにししほがまのうらさびしくも見えわたるかな

うの花くたし
○クタシハ腐ラス之。霖雨ニ卯ノ花モクサラストノ意之。

千 いとゞしく絲のはりのいづきぬらうのむぐらしきそむれぬなの

うまや
○今ヤナリ。ウマヤくハ今ヤくナリ。コヽニハ駅(ウマヤ)ヲカネテヨメリ。

六 はゆまぢのうまやくだりに人とへばはふきのちりくあれぞれは

蜻蛉 あつくべき人もあらでゞちのくれうまやかぎりになりぬとおもひし森

うまし
○クツコウナ
○ホムル詞ナリ。味ノウマキモ事物ノヨキヲホムルウマシモ元ト一ツ意ナリ。

万長 やまとにはむら山あれど中畧うまし國ぞあきつ島やまとの國は

うま人
○ウマシ人トモ云。貴人ヲ云ヘリ。

万 あさりするあまのこどもと人はいへどみるにしらえぬうま人のこと

うけひ
○神ニ祈念スルナリ。伊

万 水のうへにかずかくごときわがいのちいもにあはんとうけひつるかも

〇伊勢物語ノウケヘハ誣フ之。

うて
〇ウタレナリ。タレノ綴テ之。

うみまつ
〇海松。和名抄。海藻之。ミルノ漢名ヲ海松ト書ク。故ニ貫之ヌシ一興ニヨマレタルナ之。

うしろやすし
〇コヽロヤスシ
〇シンパイナシ
〇ウシロメダシノ反對ナリ。

伊物 つみもなき人をうけへば忘れ草おのがうへにぞおふといふなる

六 うてしよのねあひのかねをうてしかど君まさしくはきかざりけん

保憲女 くれなゐのせめてあはれめやきしのむねかもうてぬ色ぞうすき

土佐 おぼつかなけふは子の日かあまならば海松をこそひくべからまし

古 こゝろをばわりなきものと思ひしかどうしろやすくもおもほゆるかな

後 いく代のまつもうきぬまもしら菓をうしろやすくもみえぬるかな

後於 みとせあまりいはさきにすぐる天のたかきうしろやすけれ

うしろめたし
〇ウシロガミヒカルヽ
〇コヽロモトナイ
〇ケンノンヂヤ

うひ
〇初ヲ訓ム。元服ヲウヒカウブリト云。ウヒハハジメニ同シ。

うすれ
〇ウスクナル。又ウスレウスルヽトモハタラク。

うちひさす
宮　ミヤコ

古 女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたる宿にひとりたてれば

拾 わがやどにさきてみえつる梅の花風のうしろめたさは

古 我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなるものといふべかりけり

今 うれしくも秋のみやまの松風にうひての音をきゝつるかな

好忠 こゝろなきみにもこゝろうすれてたちわかれてはひとぞ恋しき

夫 なごりはあまのみやぬるむしんそのくちどのうすれて

冠辭の部

万 うちひさす宮にゆく子をまかなしみとむればくるしやればすべなし

○ウツクシキ日ノサス宮トツヾケシナリ
旧 うちひさす都の人につげまくは見し日のごとくありとつげこそ

うちなびく ワガ黒髪 春サリクレハ 春ノヤナギ
○ナビク物ニ冠ラセタリ
万 ありつゝも君をばまたんうちなびくわが黒髪に霜のおくまでに
旧 うちなびく春たちぬらしわが門のやなぎのうれにうぐひすなきつ

うちのぼる 佐保ノカハラ
○山川ニソヒテノボリ行ク道ナレバ云ナラン
万 うちのぼる佐保のかはらの青柳は今は春べとなりにけるかも

うちわたす 竹田ノハラ ヲチカタビト
○長ク遠キ意ニテ冠ラセタルナリ
万 うちわたす竹田のはらになくたづのまなく時なしわがこふらくは
古旋 うちわたす遠方人にもの申すわれそのそこにしろくさけるは何の花ぞも

うちよする スルガ
万長 なまよみの甲斐の国うちよする駿河の国とこちごちの国の

○打泔ル泔ル髪ト云フ意髪ヲクシケヅル時用ル水ヲユスルトイヘバナリ、

うつせみ 世 イノチ 人
○ウツセミハ現身ナリ、現ノ身ノ命世又人トツヾケシナリ、
万 うつせみの命ををしみ浪にぬれいらごの島の玉藻かりをす
円 こゝろにはもえておもへどうつせみの人目をしげみいもにあはぬかも
古 うつせみの世の人ごとのしげければわすれぬものゝかれぬべらなり

乃の部

のつかさ
○野ノ中ノ高キ所ヲイフ
万 足引の山谷こえてのづかさに今はなくらんうぐひすのこゑ

の中のしみづ
○野ノ中ニアル清水ヲ云、歌林良材ニ播磨ノ印南野ニアリトアレモ、此説如何アラン、
は わがためはいとゞあさくやなりぬらん野中のしみづふかさまされど
続古 [illegible]

○のら
ラニ意ナシ、野ト心得ベシ、今田舎ニテ云ノラニ同シ、

○のむ
祈ルナリ

○のごふ
拭ヲ訓ム、ヌグフニ同シ、

○のざきのさと
年首ニ神ニ奉ル調物ヲ荷前ト云、

○のりのあと
軌儀抄其他諸書ニ種

古 里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

続拾 くれなゐのはつしほぞめの色ふかくおもひそめにしわすられぬ神ぞうれ

万 夜ならべて君をきませとちはやぶる神の社をのまぬ日もなし

拾 きをそぶふかきながしつるなみだをそでをのごふいとまなれど

全 むら雨や月のむらくもさればのごひのこんぞはれゆくそらのまてらすからに

万 あづまどののざきのはこのにのをにもいもはこころにのりにけるかも

新古 たのしきの跡もりの跡えてしぐれ思ひわたらばよそながらつゝん

ミノ説アレ𪜈覚束ナシ、タヾ野中ニアル清キ溜リ水ナリト思テヨシ、

於の部

○おほかた
ヒト、ホリタイガイナド云意、

○おほせ
今負ナリ、此歌ニテハ誰ニ咎ヲ負ハセテト解スベシ、

○おぼろか
オホヨソ

○おぼろげ
オロソカ

○おぼろ
ボンヤリ

○おぼめく
サダカナラヌ

古 大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

は 大かたはおくもさらにもわすれぬ人ごころしてあるべきうつろはん

古 あきくればおのが羽風をちる花をたれにおほせてこゝらなくらん

万 ますらをとおもへるものをおぼろかにおもひてゆくれすぎのをを

於 あふしえかくやれ月の雲がくれおぼろげにやは人のこひしき

は あらきれたるつまあるをきこえそめてはふるにもあれとおぼめかれつゝ

○ボンヤリ
○彷彿（ソレカアラヌカ）ノ意

おぼめく

於 つくづくとみるゝそらのほのかにはおぼめくさへぞうれしかりける [?]

後拾 おぼめくなたれともなくてよひ〳〵に夢にみえけん我ぞその人

○オボツカナキ意

おぼゝしく

万 かぐ山に雲ゐたなびきおぼゝしくあひみしこらをのちこひんかも

同 雲まよりさわたる月のおぼゝしくあひ見しこらをみんよしもがも

○荊棘（オドロ）ノシゲレル道ヲオドロノ道トイヘド、丈ニモ限ラズ、草ノ深クオヒシゲル路ヲモ云メリ、

おどろ

拾 ますれどもとる人もなきあさぢふのいつおどろにかあらんとすらん年 [?]

新古 きえはつるおどろのしたれなるはそのめぐみにはひかりのふし [?]

○今云鳴子ナリ、又引板トモ云、

おどろかし

後 小山田のおどろかしにもこざりしをいとひたぶるにかけし君かな [?]

○高龗又蛇龗ヲオガミトヨム、雨雪ヲ司ル龍神ナリ、

おがみ

万 わが岡のおがみにいひてふらしめし雪のくだけしそこにちりけん

○正シカラヌ訃ナリ、万葉ニ逆言（サカゴト）ノ狂言ト書ケリ、

およづれごと

万 たまづさのおよづれしたはことかもこもりくのはつせの山にいほりせりとふ [?]

○悪ヲ訓ム、オロカニオナシ、

おぞ

万 みやびをとわれはきけるをやどかさず我をかへせりおそのみやびを

○己ナリ、ミヅカラ、ジブン、又時ニヨリ汝ノ意ニモナルナリ、

おのれ

於 わがつゝるみちのまもりはまんあしびきのはてにしもおのがいそけ [?]

曰 おく霜をぬさとたむけの山こえむ紅葉はおのれちりてや枝をさるらん [?]

清子 ふるきおのはられいかれむものをおの子斗と花やちるらん [?]

○オノレノ羽ヲハブキ

おのが

左 あつかきれなうりくとゆふげがおのが垣ぬくあるぞかなしき [?]

於

タル之

おのがよゝ
○オノレヽヽガ世ニナルヲ云。メイヽヽ別レヽヽニナルコ之。伊勢物語ニ。オノガ世ヽニナリニケレバウトクナリニケリト。此意之。

おのがさま
○メイヽヽ心ヽニ

おのづから
○シゼント

おのく
○各ヲ訓ム

拾秋 さよふかく旅のそらにてなくかりはおのがはかぜやよさむなるらん

は 呉竹のよゝのふる言はかはるともおのがよゝにはあらじたのもし

拾雑 やまとのうちは根ぶかく植し竹の子はおのがよゝをやひさしかるべき

拾秋 松風のよそのゝ山よりおのがさまふくふきちりぬるはかなしかれ

千 花のちるこのしたかげはおのづからそめぬきぬにも色ぞきる

新古 おのづからすゞしくもあるか夏衣ひもゆふぐれの雨のなごりに

拾雑 君が代はむかしはつれるちぎりにておのくかたるまであるらん

○メイく
○ソレく

おくらす
○後ラス之、此歌ハ今互ニ別ルトモ、心ノウチデハ同道シテ行クモ同ジコチヤ、ソコヲ獨リ残シテハオカヌゾト云フ意之、

おくつき
○墓ヲ云、今俗ニオキツケト云ヘリ、

おふけなく
○無負氣ナリ、カニタヘ又重荷ヲ負フ意之、

おこす
○熾ヲ訓ム、火ヲ盛リニスルコ之、源氏すぼろ一の巻ニ「火おこすこ」「おこて」トアリ、

おこす
○俗ニ云ヨコス之

壬二 ときはなるわかばのそめのころもそおのゝまさるゝその一しほ

古 かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさんやは

万 我も見つ人にもつげんかつしかのまゝのてごながおくつきどころ

千 おふけなくうき世の民におほふかなわがたつ杣にすみぞめの袖

拾玉 さゆる夜の枕はさえてぬるゝうづみ火のおこしおこさる世とはなりけれ

拾 こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするなかれ

おきく
俗ニオナジ

おき
和名抄ニ、熾ハ於岐比(オキヒ)、猛火ヘトアリ、

おきなさび
○オキナスサビニ、老人ダテラト云フコトヲ、メサビナドモ云ヘリ、千載集ノけきされむノ歌ノオキナサビハ古意ニ違ヘリ、老クダチ行ク意ト聞ユ、

はかた やすみしゝそれのふるさとにみつかれそむかへしぞふかおきひれたるきく
今 おきふれとあやしきなきハ吉野山のなかきはおりるちるをなんを
続後拾 名にしおハゞいざ神のよりおなじぬくのおきくしなかるらん
古物名 おきのゐてみをやくよりもかなしきハみやこしまべのわかれなりけり
拾 ゆらくみの 沖熾ヲ兼 おきつなかれハあまの浦ててかくるしほり
後 おきなさび人なとがめそかりごろもけふばかりとぞたづもなくなる
千 ゝさきされぞさなかけのおにをいつきておきなさひゆくあらの

おゆらく
おいらく
○御杖云、オユラクノラクハ見ラク恋ラクノラクニオナジ、万葉ノイヒザマハ正シ、古今以下ハ体語ニシテヨメリ、オイラクハ老ト云モノト心得ベキナリ、千載ノ頃ヨリ我身ノ老タルニモ云ヘリ、コハ用井ザル方ニセマホシ、

おしなべ
○皆コトゴトク
○スベテ

おしなみ
○オシナビカシヽ
○万葉ニ押靡(オシナミ)トカケリ、

おもひなし
○サウヂヤト思フテ井

万 あめなるや月日のごとくわがおもへるきみがひにけにおゆらくをしも
古 老らくのこんとしりせばかどさしてなしとこたへてあはざらましを
千 老らくのいのちはかりをくしてまつのふたびやうれぬるかれ
は ちりぬべき花のかぎりハおしなべていづれともなくをしきはるかな
於 さかくなれあしぶる袖もおしなべてたのむばかりのそらのなかれり
古 今よりハつぎてふらなむわがやどのすゝきおしなみふれるしら雪
続拾 名にのゝをざゝもおしなべふる雪かみ入江ならくらかぜ
今 さやけさハおもひなしとも月かげをこよひとしらぬ人やなからむ

ル故

○オモヒグマナクハ。鈴舎翁ハ思ヤリナキ意ト云ヒ。井上文雄ハ思ヲ残スクマモナキ意トセリ。歌ニヨリテ此意ニテモ聞ユルヤウナレド。猶前説ニ従フ方ナルベシ。

おもひぐまなく

○思ヲ遣ルナリ

おもひやる

○古クハ。思ヒヲ彼方ニヤルヿニノミ云ヘリ。中比ヨリハ今云想像ノ意ニモヨムナリ。

おもひやる

月 神な月おもひたえしよや住吉のまつにかゝる風もさびしき

は いづくまでちかはれつるかよそにても思ひぐまなく人のなかゆく

千 おもひぐまあらでもよしやみつるかれのものゝひのいき秋の夜の月

古 おもひやるこしのしら山しらねども一夜もゆめにこえぬよぞなき

は わがおもひやるかたぐもなしなりきはひとりおもひみだれてはし

はや 別れなんのちをくらべてなか川おもひやるこそのちぞくるしも

千 ゐなべ山おもひやるこそ世しられぬとりやせなのわかくちかん

○歌林良材ニ草ノ名ニアラズトアリ。京極黄門ハ龍膽ヲ云ト。オボツカナシ。實ハ定カナル証ナシ。

おもひくさ

○面伏也。メンボクナイト云フヿ。オモテオコシノウラ也。

おもてぶせ

○其コトヲ思ヒ思フテ寐ル也

おもひね

○佛經ヨリ出タリ。火宅三車ヲヨメル也。オモヒニ火ヲ兼ヌ。

おもひの家

万 道のべのをばながもとのおもひ草いまさらさらになにかおもはん

新古 野べちかくふしをかれがもとの思ひ草かれゆくのみぞなほあはれなる

は かざせども老もかくれぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなる

拾遺 たちわかれおもてぶせにや思ふらんかくてもふかくれゆくらん

君をのみおもひねにねし夢なればわがこゝろからみつるなりけり

今はたゞたのむるかたもあらざらんおもひねにだにあはんとおもへば

拾 世の中をうしのくるまのなかりせばおもひの家をいかでいでまし

拾遺 わがみこそうしのくるまにかけつるはおもひの家をいでしとなりけり

おもぎらひ
○ヒトミシリ。源氏若菜ノ巻ニ、児ノオモギラヒセヌコヽチシテト。コノ意ヽ。

夫 世中はいとけなきこのおもぎらひ山みしがなきまれね社なのまれ

おもがはりせぬ
○面変ナリ。面ノオトロヘヌヲ云。

全 よろづよをみれどおもがはりせぬ佐川はながれての世のためしなるらむ

おも
○母ヲオモトイヘレド、乳母ヲモ亦オモトイヘリ。チオモノ略ナリ。

万 みどりこのためこそおもはもとむといへ乳のめや君がおもとむらむ

同 くやしくも老にけるかもわがせこがもとむるおもにゆかましものを

冠辞之部

おほきみの
ミカサ山
○大君ノ御蓋トツヾケシ之。蓋ハキヌカサ之。

万 おほきみのみかさの山の帯にせる細谷川のおとのさやけさ

おほともの
ミツノハマ

万 大伴のみつの濱なる忘貝いへなるいもをわすれておもへや

○大伴ノミヅヽヽシト云意ニテ、大伴氏ノ祖、道ノ臣ノ命、健カナルマスラタケ男ナレバ、ミヅヽヽシトホメタヽヘタルナリ。委シキヿハ冠辞考ヲ見テ知ルベシ。

おほぬさの
ヒクテアマタ
○川辺ニ大祓スル時人〻湊ヒテ、大ナル幣ニ手ヲフレツヽ、引テ祓ノワザスルヲ、アダ人ノ引ク方多キニタトヘタルナリ。

古 おほぬさのひくてあまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

おしてるや
ナニハ
○古クハ、オシテルト四言ニモヨメリ。オシテルノオシハオソヒ之、デルハ立ルヲ省ケル之。委シクハ冠辞考ニ見ユ。

古 おしてるやなにはのみつにやくしほのからくも我は老にけるかな

おきつ波
タカシノハマ
○浪ノ高シト云ヒカケタリ。古今ノ長歌ニ、沖津浪アレノミマサルトモヨメリ。是ハ浪ノ荒レト云ヒカケシ之。

古 おきつ波たかしの濱のはま松の名にこそ君をまちわたりつれ

おほしまの
ナル
○周防ノ海ニ大島ノ鳴門ト云所アリ。故ニ大島ノ成ルト云ヒカケタルナリ。

は 人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな

久の部

くろ
○田ノ畔ヽ。

金葉 萬代のみるかげとみしなかりし田のもをくろはいくろまでぞあれ

くはまゆ
○繭ヲ訓ムナリ。カヒコハ桒ヲモテ養フユヱ。マユヲクハマユトモ云ヘリ。

くはこ
○蚕之衆ヲモテ育ツルユヱ。クハコトモ云ヘリ。

車をのくる齢
○七十歳ヲ車ヲカクルヨハヒト云。漢ノ薛廣徳ガ故事ナリ。

くたす
○爲极之ヲをノ部ノをのゝえくたすノ條ヲ見ヘシ。

万
つくばねのにひくはまゆのきぬはあれどきみがみけしとあやにきまほしも

万
中々に人とあらずはくはこにもならましものをたまのをばかり

新六
するがなるふじの桑子のみひ緒はゐるゝめの雲の名にゝるらし

高遠
今さらにかけし車をひきつれてあくのあらくこゝろをぞやる

薛廣夫
このぞふれハくるま歯をかくるよはひまであかはし世をもあつぎ事なり

は
あらしきハとのえくゝれ山ふかれやいるらし人のおとづれもせぬ

四之
すゞめゝらにんをよせし人のやゝてくるせる神まうさげや

くだかけ
○サマ〴〵説アレド。百濟鷄ノ義ナリト云ニ従フベシ。今云タウマルノコトゾ。

くれ
榑ノ訓ハ。儀式帳ニ材ヲヨメリ。土清云クレハキトレ(木斷)ノツヾマリタルニテ。歌ニハ暮ヲ榑ニカヨハスル多シ。

くむ
○オシハカルヒナリ。水ニカケテヨム。古クヽムトヨメル歌ニ水ノ緑ナキハヲサ〳〵見エズ。

伊物
よもあけばきつにはめなでくだかけのまだきに鳴てせなをやりつる

夫
くだかけハいづれの里をうかれきてこゝにあかつきふはあまもなくらん

後拾
まつがねのすぎのこゆけバたちの川ぞのむくれもいつぞおのゝふ

同
淺き瀬をこえ代すのつなでひきわびくれもいやつゝうまき

拾子
松川のいつかゝすでうつゝ契しかなすゞろのくれをひきあぐらん

後拾
われなんぽをくみてあふぐ川名もひやむらんくゞりのそこつぞも

同
大井川のふぐれをこゆのむんそをうるろハうるゝくゝてえろくゞき

子
あすかの川くゝとくゝて名つるも神のんそぬられあめつきのぬる

くものはたて
○雲ノ旗手ナリ、夕暮ニハ色〻ノ雲ガ旗ノ如クナビクナリ、

くゞつ
○袖中抄ニ莎草ニテ編ミタル袋ナリト云ヘリ、莎草ハ「ハマスゲ」ナリ、クゞツハ農家ナドニテ用ヰルワラフクロノ類〻、

くさのかきは
○祝詞ニ草之垣葉モ語止テ云〻トアリ、草ノ一葉マデモト云フ意ナリ、此歌ハ此詞ヲ取レルナリ、

くものふるまひ
○万葉ニハ蜘蛛ノオコナヒトアリ、フルマヒモ同シ、

くものすがき
○蜘蛛ノスカクヲ体語ニテスガキト云ヘルヽ、スカクハ巣懸クナリ、

古 夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて

新古 ながめわびぬそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕ぐれの空

万 しほ干のみつのあまのくゞつもち玉もかるらんいざゆきてみむ

拾 ねぎかくるひえのやしろのゆふだすき草のかきはもことやめてきけ

た わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

夫木 さゝがにのふるまひしるき夕ぐれにひるますぐせといふがあやなさ

拾 秋風はふきなやぶりそわがやどのあばらかくせるくものすがきを

くすり子
○禁中ニテ元旦屠蘇酒ヲ奉ルニ、マヅ薬子ニ飲マシム、薬子ハ和通少女ヲ用ウ、ソハ小児ヨリノムト云故事アレバ也、

くすり日
○五月五日ヲ薬日ト云、推古紀ニ、五月五日菟田野ニ薬猟スト見エタリ、此日薬草ヲ取ルナリ、

くす玉
○薬玉ハ色糸モテ花ヲツクリ、其中ニ薬ヲイルル也、五月五日ノ儀式ナリ、

年 まちくしふるふ見そむるくすり子はやそゑろくむ君がさめくろ

要し けふるあけぼのしらしべあやめならねどくすりびのうれちらふる

夫 くすりびのたもとにむすぶやまあゐつくりはひけばなかるべし

夫 見るほどをばあやめなすぐるさつきれの折のきづくや玉のくす玉

冠辞の部

くれなゐの
イロ
○呉藍ノ色トマデカケシナリ

古 くれなゐの色にはいでじかくれぬのしたにかよひてこひはしぬとも

くれ竹の フシ ヨ ヒトヨ
○竹ノ縁ヲモテ冠ラセシノミ

くれとり アヤ アヤシク
○呉ノ織物ノ綾ト云ヒカケタリ

くさまくら タビ
○草引結ビ枕トスル意ニテ旅ニ冠ラセタリ

やはらの
○柔ニ同シ

やかうゆく
○日数多キヲ云ノミ

ほ さくらむろふくみえんくれ竹のひとよのほどにちりもこそすれ

ほ くれとりはあやにこひしくありしかばふたむら山もこえずなりにき

万 家にあれば けにもるいひを草枕たびにしあれば しひの葉にもる

やの部

ふ やはらかにぬるよもなくてやつれぬるよるの手枕いろやかはれる

催馬楽 ぬき川のせゞのやはらた枕やはらかにぬるよはなくて下畧

万 やかうゆく浜のまさごもわが恋にあにまさらじかおきつしまもる

やど
○家所ナリ宿ト混スベカラズ

やり水
○庭ナドヘ水ヲ引入レテ流シヤルヲ云

やる
○遣ル之今云フニ同シ

やる
○破ルナリ

古 やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

同 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも

は あさくのうけぶる思ひぬやり水のそこまでなみをたづねてぞこし

古 わがせこを都にやりて塩がまのまがきの島のまつぞこひしき

同 わかれてふことをはかなくやりすてゝおくれてひとりさくらん

は 破 やればをし 不破 やらねば人にみえぬべしなくなくもなほかへすまされり

やうて
○其マヽスグニトリモナホサズナド、其歌ノカヽリニヨリテ訳シ方ニタガヒアリ、

拾 こゝろねのはかなきさへぬやどのいのちとゝしぐれ

何 かくばかりいとでもふかくなしなどやそふれぬみやらなん

やつす
○ミスボラシクスナリ、折ヤツスハ、ヲリヘラスノ意、

金 わがやどふみこんくまるばかりそられやつしそ山ぶきの花

やつれ
○前ノ訳ニ同シ、自他ノ違アルノミ、

桃本 色くかけるはなぢをそもまぞめにやつれし袖をおもひこそやれ

古 君しのぶ草にやつるゝふるさとは松むしのねぞかなしかりける

やらで
○何ヽモ得為ズニ
○コハ行ベキヲユカズ咲ベキヲサカヌ意ナリ、ユカデサカデト云ベキ所ニ文字タラネバトテ、ヤラデト云ヘル詞ヲ用ヰルハ非ナリ、

拾 けふやらで山路くらしつるそこぎれいかにつもるのきにまちけんに

続千 いつしかとおもふにさけぬやらでまてもみえぬ花のみゆらん

やまぶし
○僧ノ事ナリ

は いづれをか雨もやらん山ぶしのあらぬことゞもふかうましかれ

やまびこ
○山彦トカク、山響ノ事ナリ、俗ニコダマト云ヘリ、

古 うちわびてよばはむこゑに山びこのこたへぬ山はあらじとぞおもふ

六 よしの山みやまの山びこあらはれずやわがなぶこゝろまかせてたえもせぬ

やまわけ衣
○顕昭ノ注ニ、山臥ナドノ山ヲ分ケ行ク衣ヲイフトアレド、旅人ニモ云ベシ、

古 はるさめのきるのまゝにくりたゝて山わけ衣ぬれてきぬらし

新続古 こえくらし山ぶところもさしてゆくさきしらぬ袖のしぐれけるかな

やまかたづく
○山ニカタヨルナリ
○万葉ニ海カタツキテ谷カタツキテトモヨメリ、

千 夕まぐれ山かたづきてたつとりのはおとにたかをあはせつるかな

万 やまだもとあきつてしめをはへてこの山かたづきてなにをまちけん

冠辞の部

古事記 古今
やくもたつ出雲八重垣つまごみにやへがきつくるその八重垣を

○やくもたつ　イヅモ
イヅモハ出ル雲ト云語ナレバ、イヤ雲タツトコトバヲ重ネ冠ラセ玉ヒシナリ、

万
あさか山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわがおもはなくに

○やまのゐの　アサキ
山ノ井ハ浅キモノナレバ浅シト云フ一ニ冠ラセタリ、

万
剱よりひふねのとしあればやきだちのとごゝろもちれは思ひ山川も

○やきだちの　トゴヽロトナミノ関
刄ノ利キヲ人ノ心ノ鋭ニ云ヒカケシナリ、

万長
やすみしゝわがおほきみのきこしをす天の下に国はしも多にあれども

○やすみしゝ　ワガオホキミ
八隅マデ残ナク知シメス天皇ト申スナリト誰モ思ヘド、縣居翁ハ安ラケクミソナハシ知ロシ召シ玉フト云意ナリト云ヘリ、

万
やますげの実ならぬことを我によせいはれし君はたれとかぬらむ

○山すげの　ミナラヌ
マコトナラヌコヲ、実ナラヌト云テ、山菅ノ実ナラヌト云カケシナリ、

末の部

秋
旅人のかやりつるなふまろやは人をおもひわすらる

今
しくれのふるやのつまでまつらるゝかれ

同
津のくにのまろやは人をあくた川きみこそつらきせゞは見えしか

○まろ
我トイフニオナシ又男子ノ通称

万
わぎもこがまろねのおびはきのふよりたびのまろねにひもとけぬ

夫
ちゝ山のさゝやかなのまろねもこのまるかねの

○まろね
帯紐トカズニネル獨寐ヲ云、マロブシト云フモ同シ、

旧
いつはりのあめるいその屋のまばらなく我をわびさせるこのな

子
ちらさは風ちりや須磨の関屋の板びさし月もれとてやまばらなるらん

○まばら
疎ヲ訓ム、俗ニ同シ、

○まばゆし
マボシイト云ニ近シ。真向ニムカハレヌノ意。士清云眩映ノ義ナルベシト。
○まにまに
随意ナリ。晴ル、マニマニハ、晴ル、ニ随ヒ随テ之。
○まほ
真顔ナリ。正面ヲ云。
○まぼろし
夢ノ如ク影ノ如キヲ云ヒ又幻術方士ヲモ云。此前ノ歌ハ夢幻ノ意。後ノ歌ハ方士ナリ。
○まどろむ
少眠ナリ。目蕩ケル義ナルベシト士清云ヘリ。
○まとゐ
圓居ナリ。今俗ニ云車坐ニ居ル之。橋守部云、古本今昔物語ニ、纏居ト書タルヲ正字トスベシ、纏ハリ居ルヨシナリト。此説然ルベシ。
○まがひ
マギレナリ。乱ル、ヲ云。ちノ部ノちりのまがひヲ見合ハスベシ。
○まかる
辞シ去ルコト也。死ヲ

新古 まてらのおもかげ[illegible]ひるまもなかりけり
万 かくらくの[illegible]のまにまに
古 このたびはぬさもとりあへずたむけ山もみぢのにしき神のまにまに
新拾 秋の月のまほに[illegible]山のは[illegible]
拾藻 [illegible]
千 [illegible]
今 [illegible]
拾藻 [illegible]

拾 まどろまぬ[illegible]
うきことのまどろむほどはわすられてさむればゆめのこゝちこそすれ
古 おもふどちまとゐせる夜はからにしきたゝまくをしきものにぞありける
拾 [illegible]
万 秋萩のちりのまがひによびたてゝなくなるしかのこゑのはるけさ
古 此さとに旅ねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて
万 [illegible]

身マカルト云、行クコトヲ物ヘマカリケル、又俗ニマカリ越スナドイヘルハコトバノイタク轉ジタルニヽ、

まがき
○シバガキ也、和名抄ニ籬、和名末加岐、一ニ曰末世、柴ヲ以テ造ルトアリ、

古 里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる

惟岑 あさぎりのたちかくしたる山里はまがきの荻ぞもろこゑにまく

まよひ
○ヤブル、ナリ、かゝノ部ノかゝふのまよふニ詳カナリ、

万 おほしゆくみやまさきうりの鹿衣かゝのやうにもとかれもこそ

月 風のとのとわきかざすかきまねたすきのくずれきよひきよう

まだしき
○其時節ヨリ前ニノ意、未ダシキ也、

古 さ月こばなきもふりなんほとゝぎすまだしきほどのこゑをきかばや

新葉 咲きそめしのちはかはれぬはなもまだしきものをたづねてぞみる

まだき
○其時モコナイノニ、モハヤトト云意、朝マダキハ未明ナリ、

古 わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君がこゝろにあきやきぬらん

は はなすゝきほにいづることもなきものをまだきふきぬる秋のさがかれ

子 ちるとみてあるべきものをまだきよりかれぬることをうらみつるかな

またく
○マタクハ待ナリ、マツヲ延テマタクト云、タクノ約ツナリ、

古 いつしかとまたく心をはぎにあげてあまの川原をけふやわたらん

またく
○全（マツタク）ヲモヨメリ

万 若草のにひたまくらをまたくかくひばかりとやがてかつめやも

またゝく
○瞬ヲ訓ム、目叩クノ義ヽ燈ニマタヽクトヨメルハ、風ニテ焔ノチラヽヽスルヲ云、源氏夕ガホノ巻ニ、火ノホノカニマタヽキテ」トアリ、

於書 荻をあふぐるやのうちねのかぜにまたゝくともしびのかげ

まれら
○マレ（稀）ト云ニ同シト心得ベシ、只コトバヲエルメタルノミ、キヨ

於 いそのうへのわさはんべんのよにまれらなるかねぞともへん

中務 山ざとにおとづれらるゝまれらなるあきのゆふべのきくぞ

ラナドノ「ラ」ニ同シ、

まさきく
○サキニマア
○サキニト云意ニモヨメリ

まつはる
○纒フ意

まつろはぬ
○万葉ニ不奉仕ト書テシカ讀マセタリ、コナタヘマトヒツカヌナリ、服従セザル意、

まなご
○真子ノ意ナガラ、万葉ニ愛兒最愛子トモカケレバ、愛子ノ一ニイ

古 わがためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけばまづぞかなしき

同 まその山すそをみてぞゆりかへしつらき人まさきくありこそとて

長 よろづよにかくしもがもと春のそれまでひかりわたるえではるをしも

同 うつせみのよのひとなれば身のうちをまつらんめかけてのちのよそひをおもひし

長 ちはやぶる人をやはせとまつろはぬ國ををさめとも

万 人ならば母がまな子ぞあさもよし紀の川のべのいもとせの山

万長 父ぎみにわれはまな子ぞ母とじにわれはまな子ぞ

フナリ、催馬楽ニマナムスメトモアリ、

まく
○枕ニスルヲ云

まくりて
○袖ヲマクリコムナリ、ソデヲカヽゲテ手ヲアラハスニハアラズ、證歌ヲ見テ知ルベシ、

まや
○兩下、和名萬夜、真屋ノ儀ナルベシ、四阿（アヅマヤ）ニ對シテ云ヘ、「アマリ」ハ軒ヲ云ヨシ、

万 かくばかりこひつゝあらずは高山の岩根しまきてしなましものを

同 おきつ浪きよるありそをしきたへの枕とまきてなせるきみかも

は於 袖ぬれば露こぼれけり秋の野はまくりてぞゆくたびうとはみな

新撰六 我袖はまくりそへてかくせどもいろでのさかみぬるなみだかな

古六 まくらかの袖も恋のこくれねはたちこしの夕の衣きなからも

催馬楽 人つまはほふまかりしあづまやのまやのあまりもあれしぞかし

同 袖が妻はあのがかきねをはなれてまやのあまりにひまもなし

まし
○マニシノ轉ジタルナリ前ノまにしヲ見ヨ。

まぶし
○狩スルニ、柴ナド折懸テ身ヲカクス物ヲ云。

まこと
○実ニ之

まことに
○上ニオナジ、マコト、ト云ヘルハフルク、ニヲソヘタルハ後也、

今 月をこそあすかみんのちかしらばゆくすゑにあくがれあかすまし

同 神な月しぐれの雨のふるほどにいろくまさるすゞか山こえ

古 まぶしさすさつをの身をもあぐらふめそ秋のあきふくるなり

万 きこしをすくにのまほらもかんさびとなりてこれのみしま

同 世中ハまことふたよハゆかざらしすぎにしいもにあはなくおもへバ

六 まことにはなさるはくのまくらもふさまじはふ我をゑつやはきみ

古 流らへてながけるのかげのきよきれまことにいつや玉川のみね

新古 おのづからさればあれとそおもふまにまことにつらき人のとがにあるぬる

まてかた
○荻原元克云、海人ノ汲クムニ、タゴテフモノニテ荷ヒモロ手ヲソヘテ、肩ヲユリイトマナケレバ、左右肩ノ意ナリ」ト、此説ハ荷田翁モ既ニイハレシ也、中世ノ説ハ受ケガタシ、左右肩ノ説ニ従フベクカタムカル。

まてつがひ
○五月左右近ノ馬場ニ騎射アルナリ、三日ハ左近、四日ハ右近、荒手結之、五日ハ左近、六日ハ右近、真手結ナリ、真ノ手合セノ義ヘし。

まさし
○キツトタシカト云コ也、俗ニモ、是ガマサシクソレヂヤナド云ヘリ。

まさきく
○幸クナリ、マハ発語、サイハヒト云フコ。

いせの海のあまのまてかたいとまなみながらへにける身をぞ恨むる

新六 梓弓まゆみはいはぞまてつがひあやめの根をくりそへてひく

古 ゆふけとふうらまさしきものならばあふげばさしてもとめまし

同 かくこひんものとハ我もおもひきこころのうらぞまさしかりける

同 ゆひそめしひもとぞとかふ思ひのまさしくやむくふあらはれにけりやハ

万 わがいのちまさきくあらば又も見ん志賀の大津によするしら浪

同 まさきくて又かへり見んますらをの手にまきもたるともの浦わを

○描金ヲ云。俗ニ蒔繪トカク之。

まきゑ
今(?)玉くしげふたみのうらのひきなびくまきゑにみゆる松のむらだち

まぎれ

○今云マギレニ同シ。乱ル丶意。

古 山かぜにさくらふきまきみだれなむ花のまぎれに君とまるべく

まゆ根かく

○人ニ恋ラルレバ眉ノカユキト云諺アルナリ。万葉集ノ中ニヨミ歌多シ。

万 いとまなく人のまゆねをいたづらにかゝしめつゝもあはぬいもかも

同 まよねかきしたいぶかしみおもへるにいにしへ人をあひみつるかも

まめ

○神代記ニ誠忠ヲヨメリ。実術ニカタキヿ之。又伊勢物語ノマメ男ハ好色人ヲタヽハムレテ云ヘリシ之。

古 まめなれどなにぞはよけくかるかやの乱れてあれどあしけくもなし

伊 [illegible]

まじき

○マジキハ。俗ニ云何々スマイ。ナド云フマイニ當レリ。タユマジキハタエマイト思フノ意。カヘルマジケレハ。カヘルマイト云フヿ之。

はれ(?) あだなりとつひはすまじき別かは[illegible]

蓮生 まめやかにすまじきすだれにこのみしも玉かづらあるひのあまかけてあれぬる

令 よそにてはさかりときつる花なれどちるまではえこそかへるまじけれ

詞 ほどゝ人はまさるべきよひの月あれやまむとてえらるるのむすまじき

まして

○イハンヤ

○イチバイ

○俗ニモマシテト云之。

古 秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

おれ(?) おもふまじふつれなくしてあはれとくぎれましてこゝろのありはいつもぞ

拾(?) はれまさる秋の庵はありけれどなほましてきえんなみのなかくれ

まひ

○マヒハ幣ナリ。人ニオクル品ナリ。今マヒナヒト云ニ同シ。

万 玉ぼこの道にちまひわかれなばあかぬ夫をこひつゝしをらし

古雑(?) 春くればさくべきまづさくあらぬむかしのまひなきのなあれや

ませ
○柴垣ヽ、マガキニ同シ。

まがねふく
○吉備ハヨキ鉄ヲ出ス所ナレバ冠ラセタリ。吉備ハ今ノ備前備中備後ナリ。キビ

まくらがの
○久良我ハ地名。久良ノ反ハ許ナレバ約メテコガトモイヒシ故重ネタルナリ。コガ

ますかゞみ
○マスカヽミハ真澄鏡テルミル オモカゲ キヨキ カゲテ

拾玉
ませのうちもゝくろし捨てし夜ばゝまきあつめし白ふかれける

胡蝶
ませのうちに根をのこしけむたけの子のおのがまゝにやおひたつべきさ

冠辭の部

今
まかねのたくふつけてやかすむらし吉備の山人まきをきるらし森

万
まくらかのこがのわたりのからかぢのおとたかしもれねなへ子ゆゑに

万
ますそ清てるべき月をとらへのそらかくさるあまつきりかな毋

古六
ゆく年のをしくもあるかなます鏡見るかげさへにくれぬと思へば

ト云意ナリ。マスミノカヾミトモヨメリ。鏡ノ縁モテテル オモカゲニ冠ラヒタルナリ。

新古
山鳥の尾のへ比月のはすゞみおもかげくもや荻のあふくらん

雅言解巻三終